

## サミュエル・バトラーとダーウィン説(Ⅰ)

—『生活と習慣』について—

飛田茂雄

## 1. 宗教と科学との和解

サミュエル・バトラー (Samuel Butler, 1835-1902) は、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』を読んだとき、すでに正統的なキリスト教の教義に対して重大な疑問を抱いていたにもかかわらず、宗教と科学との和解は可能であるという立場からダーウィン説に接近した。もちろん、洗礼の意義や祈禱の効果、さてはキリストの復活そのものにまで懐疑的であったくらいだから、バトラーの宗教観は最初から流動的で、父親シムボルとしての権威ある究極的実在を求める気持ちが非常に強くあらわれることもあり、合理主義的なキリスト教批判に傾くこともあり、またいわゆる広教会 (Broad Church) の立場に共感を寄せることもあるのだが、結局そのいずれをも排することなく、またそのいずれにも徹することなく、依るべき独自の神ないし第一原理を見いだそうとするのである。そしてその宗教観の内容が明確化するにつれて、ダーウィン説に対するバトラーの態度は、信奉から懐疑へ、懐疑から修正へ、修正から積極的な論駁へと変化を見せるのだが、信仰と科学との和解という基本的な立場は、そうした表面的な変化にもかかわらず、終始一貫して守られている。というよりもむしろ、その立場を貫いたからこそ、ダーウィン説に代るべき合目的的進化論を主張せざるを得なかったのである。

しかしバトラーの特異性は、宗教と科学との和解という方向そのものにあるのではない。そういう方向をたどることは、ダーウィンの進化論に接する

当時のイギリスの知識人層にあってはごく一般的な精神態度であった。もちろん、よく知られているように、ダーウィンが論証しようとする生物の非定方向的進化は『創世紀』の教えに反するという理由から、キリスト教的指導者による激しいダーウィン説攻撃が行われたことは事実である。そこで、世論が異常なまでに教会の権威に盲従したヴィクトリア朝のことであるから、一般民衆も彼らにならってダーウィン説に非難の矢を向けたと考えられがちであるが、民衆の進化論反対の動きは意外に表面的なものにとどまり、その上ごく短期間で下火になってしまった。トマス・ハクスリー (Thomas Henry Huxley) にはなばなく論争を挑んだウィルバフォース (Bishop Wilberforce) や、(ダーウィン説の先駆者とも言うべき)ライエル (Charles Lyell) の地質不変説を攻撃したフィリップ・ゴッス (Philip Henry Gosse) をはじめとするファンダメンタリストたちの主張は、一時世論を大きく率いるかのごとくに見えたが、1860年代の終わりにはもう民衆から浮き上がり、教会自身の内部からさえ嘲笑の的にされている。つまりそれほどヴィクトリア朝イギリスの民衆は科学の進歩を歓迎し、ファンダメンタリズムに対して隠れた疑惑をつのらせていたと言える。産業革命による近代化の恩恵を身をもって体験し、病原菌や、麻酔薬や、電磁気や光学等々の研究が直接生命や生活のために役立つことを知っていた彼らには、徐々に科学的な思考方法を受け入れる素地が養われていたのだろう。特に、市民社会の因習に縛られていない労働者たちの多くは、もっとも早く科学を受け入れる一方、臆面もなくキリスト教に背を向けるに至った。中産階級の知的エリートの動向はそれほど単純ではないが、大勢としては科学の振興に協力しつつ、新しい科学の学説とそれぞれの宗教的な立場との和解をはかるようになった。その端的なあらわれのひとつが、1869年に設立された the Metaphysical Society (形而上学会) である。

ブラナウスキ (Jacob Bronowski) の見解によれば、この Metaphysical Society は、中産階級の人々がキリスト教の立場から科学に対して憤激に満

ちた攻撃を加えてきた一時期に終止符を打った。そして、「それ以後、信仰に対する新しい科学的な態度は、まず許容され、つづいて受け入れられ、遂にはごくまともなものとして認められるに至った。」その結果、不信仰が勝利をおさめたというわけではないが、「不信仰も世界を見るひとつの確固とした、筋のおった立場であると認められるようになった」し、「信仰はすでに今日のようなもの、つまり、ほとんど実践の伴わぬ、非公式で、どちらかといえば消極的なものになった<sup>(1)</sup>」という。ブラナウスキは十年あまりつづいたこの月例会が、ファンダメンタリストの火消しの役割を果たした点を強調するあまり、ハクスリー、ティンダル (John Tyndall)、ジョン・モーリー (John Morley) らの不可知論者や、無神論者として知られているクリフォード (William Kingdon Clifford) らの影響力のみを重く見ているが、もともとこの会にはカトリックの枢機卿にまでなったマニング (Henry Edward Manning)、ヨークの大監督、ユニテリアンのマーティノー (James Martineau)、キリスト教的自由主義者 グラッドストーン (William Edward Gladstone) など、各教派のキリスト教徒を含むあらゆる方面の知的指導者たちが顔を並べており、その本来の目的も、旧来の信仰と、新しい科学に対するその関係とについて自由討議を行なうというところにあった。バックリー (Jerome Hamilton Buckley) は、この会の創立者のひとりであるテニスン (Alfred Tennyson) の意図を忖度して、「この桂冠詩人は、同時代の知的な指導者たちが、それによって〈進歩した知識〉と人間の精神的な諸目的とを和解させるべく努めている手段 (“the means by which the intellectual leaders of his time were seeking to reconcile ‘advanced knowledge’ with the spiritual purposes of man”)<sup>(2)</sup>」を発見しようと欲したに相違ない」と述べているが、こうした和解の試みこそ Metaphysical Society に集う人々

(1) J. Bronowski, "Unbelief and Science," *Ideas and Beliefs of the Victorians*, ed. Harman Grisewood (London, 1950), p. 168.

(2) J. H. Buckley, *The Victorian Temper* (London, 1952), p. 186.

の、ひいては中産階級の知的エリートの、基本的な精神態度のあらわれであったと見てよからう。

宗教、あるいは宗教に代るべき自己の信条と、新しい地質学や進化論を中心とする科学との和解という方向においては、若き日のバトラーの場合も Metaphysical Society の会員たちの場合もさして変りはないが、注目すべきことは、後者がほとんど例外なく新しい科学をそのままの形で受け入れながらも、結局は旧来の信条を墨守するにとどまったのに対して、バトラーは——この種の和解を、自己の精神的な安定のために絶対に必要な条件とする、切実な動機を持っていたので——<sup>(3)</sup>存分に納得がいくまで信条と科学との双方に対して批判と修正を加えていることである。もちろん、そこから生まれてきたバトラーの神観や進化論の内容は類のない特異性を持っている。しかし、バトラーの体系化された結論はあまりにも観念的であり、内容の特異性にもかかわらず表現が陳腐で、真理を語ろうとするときの彼独得の語調 (voice) を欠いている。その点、『生活と習慣』(Life and Habit, 1877)<sup>(4)</sup>は思想体系としてははなはだ未熟ではあるが、宗教と科学との和解の道を求めようとするバトラーの切実で内面的な努力がいきいきと感じられるばかりでなく、その文体に諷刺家的な才能が存分に発揮され、奔放な想像力も展開されており、進化論や神に関する他のどの作品よりも生気の溢れる作品となっている。

自然科学史的な興味からではなく、バトラーの文学をより深く理解するための予備作業としてバトラーによるダーウィン説批判を見ている稿者としては——非合目的的な決定論に抵抗して宗教と科学とのふたつの立場から、懐疑の余地なき人間存在の基本条件を探求した彼の思想発展の大筋はもちろんたどるが——生物進化に関する細かい科学的な論議よりも、むしろ文学的な

(3) この点については拙稿「サミュエル・バトラー論序説」(『英文学思潮』Vol. XXIX, No. 1, pp. 194-216.) に詳述した。

(4) この題名の邦訳は「生命と習慣」としたほうが内容に一層忠実であると思うが、ここでは一応従来のもを用いておく。

発想によって合目的的生命観を発芽させようとしている『生活と習慣』の前半の部分に一層の注意を向けてみたい。

## 2. 『生活と習慣』の基本的性格

『生活と習慣』執筆に至る過程は前稿に述べたとおりで、進化の要因として生物に内在する意志や欲望をあげる考えかたは、『エリウォン』(Erewhon, 1872)以前の機械論から、徐々に生まれてきたものである。ただ、バトラーは『生活と習慣』を書き進めるまで、自分の言ったことの意味を充分には理解していなかったらしく、『ノートブックス』のなかに、「『生活と習慣』を書きはじめたとき、わたしには自分の行く手がはっきりとは見定められなかった。なにか大きなものに近づいていることはわかっていたが、自分というものがよくわかるまで待つてから書きはじめたのでは、その大きなものをしっかりつかまえることは決してできなかつたであろう<sup>(6)</sup>」と記している。ひとつの方向を定めた精神の働きが、悟性を乗り越え、理性を引きずって独走していく様態を、われわれはバトラーのパラフレイズ不可能な表現によって垣間見ることができる。「その理論はぼくを脅やかすのです——そいつはまったく遠大で破壊的なものです——そいつはぼくを圧倒する。そのなかには実のところ真理らしい真理なぞ一片もないんだ。そんな恐怖にとらえられるのです<sup>(7)</sup>」とバトラーは言いながら、あらんかぎりの叡智を傾けて、わざとその(独走した)仮説に対する反論を試みるが、いかなる反論もそれに太刀打ちできないことを知って、ようやく自己の意味していたことと、その正しさを

(5) 「サミュエル・バトラーとダーウィン説(Ⅰ)」(『人文研究』第28輯), 1964. この稿の最後の部分 p. 46, ll. 7-8の「および“植物の権利”の章」を削る。p. 47, ll. 6-7の「『エリウォン』の“植物の権利”の章で」を「『エリウォン』執筆以後(特に1874年以降)」と訂正。いずれもはなはだ不注意な誤りであったが、全体の論旨に影響を及ぼすものではない。

(6) *Further Extracts from the Note Books of Samuel Butler* (London, 1934), p. 113.

(7) Letter to Miss Savage (August 1876), *Letters between Samuel Butler and Miss E. M. A. Savage, 1871-1885* (London, 1935), p. 136.

自覚する。「バトラーは…ベルグソンよりもさきに創造的進化の原理を体系化した<sup>(8)</sup>」と言う者がいるが、もしバトラーとベルグソンとに本質的な類似点があるとすれば、それは体系づけられた理論の内容というよりは、むしろ上に述べた天才的な思索の過程であり、その過程を生きたままとらえている芸術的な——と言ってもよいであろうほど精神の輝きがいきいきと感じられる——表現方式である。バトラーは科学の問題の解明に芸術的な価値を持たせることの可能性を『生活と習慣』の最後の部分で論じている<sup>(9)</sup>。そこで彼は、芸術もやはり科学の方法と同じく絶対の真理に到達する道ではないと言い、『生活と習慣』は科学的価値と芸術的価値のいずれの椅子にもつせず、その両方の中間に落ちたようなものだと謙遜ぶっているのだが、その本心が奈辺にあるかは想像に難くない。バトラー自身が『生活と習慣』の冒頭でことわっているように、この書物は「科学についてはなにも知らないが、周囲の事象について（あまり深すぎない程度に）冥想したり思索したりすることの好きな、各種各様の人々をたのしませ、興がらせることだけを目的としている<sup>(10)</sup>」とも言える。だが同時に、バトラーが「この書物の最初の一頁から最後まで、生真面目一本やりであり、おそらくそうでありすぎる（“I am in very serious earnest, perhaps too much so, from the first page of my book to the last.”<sup>(11)</sup>）」ということばも額面どおり受けとってよいと稿者は解する。「バトラーの意図は“settle”することではなく、“unsettle”することにある」とか、『生活と習慣』をはじめとする進化論に関する彼の著作の価値は、「ほとんど例外なく、否定的で破壊的なそれである<sup>(12)</sup>」といったファーバンク（P. N. Furbank）の解釈は（前稿の6.で述べたとおり）、バトラーの諷刺家としての性格の、そのまた半面のみをとらえた謬見である。

(8) Clara G. Stillman, *Samuel Butler: a Mid-Victorian Modern* (London, 1932), p. 128.

(9) *Life and Habit* (London, 1935), pp. 302-304.

(10) *Ibid.*, p. 2.

(11) *Ibid.*, p. 305.

(12) P. N. Furbank, *Samuel Butler (1835-1902)* (Cambridge, 1948), p. 53.

### 3. 無意識化した過去の習慣

『生活と習慣』の骨子となっている考えは、幾世代にもわたる無数の反復によって定着した習慣が、個体あるいは種の記憶として無意識化したものが本能であり、遺伝とは本能、従って記憶された先祖の習慣の伝承であるが、その習慣は個の生への意欲が形成したものであるから、人間（あるいはその他の生物）の遺伝は合目的的だ、というにある。それ自体、すでにダーウィン説とは本質的に異なるものであるが、バトラーは『生活と習慣』執筆中（1877年の10月から11月にかけて）マイヴァートの『種の創生』（St. George Mivart, *The Genesis of Species*, 1871）を読み、自分の説と同様のものがラマルク（Chevalier de Lamarck, 1744-1829）によってすでに主張されていたことと、ダーウィンの自然淘汰説が進化の説明にならぬことを教えられ、急いで自然淘汰を肯定していた部分を書き改め、ラマルク説の再評価などについて五章を書き足し、否応なしにダーウィン説を攻撃することになった。『生活と習慣』出版後、バトラーはラマルクやビュフォン（Georges Louis Leclerc, Comte de Buffon）やエラズマス・ダーウィン（Erasmus Darwin）の著書を読み、進化論の歴史をたどることによってダーウィンの独創性に疑問を投げかけ、目的論的進化論の正しいことを主張することになるのだが、バトラーの卓抜な創見は、マイヴァートの教示などにはかかわりなく、上に要約した本能論の展開方法のうちにある。

この本能論の萌芽が文章の形で最初にあらわれたのは1874年の7月、バトラーが、ある破産した会社の名目上の重役として、実状調査を兼ねて投資した金の一部を回収するために、その本社のあるカナダのモンリオールを訪ねていたときのことである。美しく晴れた夕方、眼下にセント・ロレンス河の清流と広大な山野とを望むモンリオール山に登り、折から鳴りはじめたノートルダム大聖堂の妙なる鐘の音を聞きながら記したノートは、『無意識記憶』（*Unconscious Memory*, 1880）の第二章によれば、『生活と習慣』（の

p. 52) にとり入れられたのと同じ文章であったという。このノートにはバトラーの発想法や文体のすぐれた特徴があらわれている。

“It is one against legion when a man tries to differ from his own past selves. He must yield or die, if he wants to differ widely, so as to lack natural instincts, such as hunger or thirst, and not to gratify them. It is more righteous in a man that he should eat strange food, and that his cheek should so much as lank not, than that he should starve if the strange food be at his command. His past selves are living in him at this moment with the accumulated life of centuries. ‘Do this, this, this, which we, too, have done and found our profit in it,’ cry the souls of his forefathers within him. Faint are the far ones, coming and going as the sound of bells wafted to a high mountain; loud and clear the near ones, urgent as an alarm of fire.”<sup>(13)</sup>

（「ある人間が過去の自己たちから離反しようと試みても、衆寡敵せず成功するはずはない。違った行きかたをしようという望みの度が過ぎて、たとえば飢えや渇きといったような自然の本能まで失い、そうした本能を満たし得ぬ状態にたち至ったら、その人間は降参するか死ぬか、どちらかにきまっている。人間にとっては、もし怪しげな食物でも手に入れられるというなら、飢えて死ぬよりは、その怪しげなものを食べて頬にいささかの衰えも見せぬほうがよほどまともだ。過去の自己はいまこの瞬間にも、何世紀にもわたって蓄積した生命をもって、当の人間のなかに生きている。『これを、これを、これをなせ。われわれもこれをなし、これによって利益を得てきたのだ』と彼の先祖たちの魂が彼の内で叫ぶ。遠い先祖の魂たちの叫びはかすかで、高い嶺にこだまする鐘の音のように流れては去る。

(13) *Unconscious Memory* (London, 1935), p. 20.



近い先祖たちの魂の叫びは大きく明確で、まるで火災警報のように切迫した感じである。』)

『生活と習慣』にこのノートを取り入れたとき、バトラーは、おそらくノートル・ダムノートルダムの鐘の音を思い起こしながら、つぎの文をあとに補った。

“‘Withhold,’ cry some. ‘Go on boldly,’ cry others. ‘Me, me, me, revert hitherward, my descendant,’ shouts one as it were from some high vantage-ground over the heads of the clamorous multitude. ‘Nay, but me, me, me,’ echoes another; and our former selves fight within us and wrangle for our possession.”<sup>(14)</sup>

(『待つのだ』と叫ぶ魂。一方『もっと大胆に進むのだ』と叫ぶ魂。『わした、わした、わした、こちらへ帰るのだ、なあ、わが子孫よ』と、地の利を得た高みから騒がしい群衆の頭めがけて叫ぶかのごとき魂もある。

『いや、わした、わした、わした』と別の魂がおうむがえしに叫ぶ。こうしてわれわれのかつての自己たちはわれわれのなかで戦い合い、われわれを自分のものにしようとして言い争う。』)

ここで文章のリズム、比喩の適切さなどと同様にわれわれの注意を引くのは、シェイクスピアからの引用と<sup>(15)</sup>欽定英訳聖書の影響を思わせる文体である。特に聖書の文体はバトラーのあらゆる作品に見られるもので、ここにも、神に背きながら神を求めないではいられなかったバトラーの精神状況がうかがわれ、バトラーの文学を理解するひとつの大きな鍵ともなっているのだが、ここでは問題を指摘するにとどめる。

このノートに表明された、本能とは人の過去幾世代にもわたる自己にほかならぬ、という考えを、バトラーはその後二年間にわたって発展させ、整理した結果、過去の自己の習慣のうちどういものがどうい状態で受けつが

(14) *Life and Habit*, pp. 52-53.

(15) “eat strange flesh”と“cheek ... so much as lank not”は *Antony and Cleopatra*, I, iv, 66-71 の Julius Caesar の台詞からの引用。

れるかについて、ごく単純だが明確な結論に達した。『生活と習慣』はまず、知識や習慣は完全に習得された暁には無意識化するという事実を明らかにする。

経験によって明らかだが、いかなる知識も習慣も、最初は意識的な努力によって学習されるが、やがて十分に習得した部分については、それを働かす場合に意識的な努力を必要としなくなる。未熟なピアニストなら、音符、リズム、指の運び等々、数千、数万のことがらに注意を払わなければならない曲を、上手な人なら暗譜で、しかも明らかに他人に耳目を傾けているといった状態で、らくらくと正確に弾奏する、といったことがいくらでも起こり得るわけだ。ピアノ演奏の場合にかぎらず、歩行でも、読書でも、会話でも、練習を積みば積むほど不安感や疑惑が減少し、それにつれて意識的な自己分析や自己抑制が少なくなってくる。つまり、なににしる、ものを完全に知ってしまえば、知っているという意識が失われる。ここでバトラーは得意の思考転回を行なう。完全な知識が無意識化するというのならば、無意識とは完全な知識ではないのか。バトラーはこれを全面的に肯定するわけではない。もちろん完全な無知も意識を伴わないからだ。しかし、二つのことは明らかである。ひとつは、完全な知識はしばしば完全な無知と同じように見えること。完全な記憶と完全な忘却についても同じことが言える。もうひとつ、少なくとも行為に関する場合、人がなにか複雑で困難な行為を無意識にやっているのを見て、その人間が過去に同様の行為を非常にしばしばくりかえしたと推察するのは正しいということである。

人間がほとんど、あるいはまったく、意識的な努力なしにくりかえしている習慣は、呼吸、嚥下、消化などで、こうした自動的あるいは半自動的な作用に人々は「遺伝的な本能」(“hereditary instinct”)という名を与えて説明をした気になっているが、ふつう行為が機械化するまでには多くの練習と失敗とが必要なのに、幼児ですらこれらを完全に行い得る理由はなんら説明されていない。だが、幼児にしる、だれにしる、こうしたことを現にしてい

るといふのは、そのやりかたを熟知しているからである。しかも自分が知っていることを知らない、つまり自己の知識に意識が伴っていないということは、その知識が完全だといふなによりの証拠であり、従って過去無数回にわたってそれらを学習し練習したことを証明していると言えよう。明らかに生誕ののちに獲得したものである言語習慣、起立の姿勢、そしてもろもろの芸術や科学などには明確な意識や自己抑制力が伴うのに対して、嚙下、呼吸、視聴作用などにあまり意識的な努力が必要でないのは、後者が出生のはるか以前に——人間の先祖が人間以前の段階にあったころ——獲得された習慣だからである。してみると、全然意識を伴わず、自制がほとんど不可能である消化、脈動、血液の酸化等の作用は、もっとむかし、人間の先祖が脊椎動物以前の段階にあったころ獲得した習慣だと思われる。だからわれわれ人間を生かしているものは過去のわれわれ自身なのであって、その無意識記憶はわれわれがなにか不慣れな状態に陥ったとき、あるいははじめてなにかを行なうとき、内部から語りかけて適切な指示を与えてくれるのだ。

こう考えるバトラーは、人間の出生 (birth) というものの意味を誇大視することをいましめる。無意識記憶はすでに胎内において生命のもっとも重大な活動を可能ならしめているからだ。バトラーによれば、「出生とは、疑惑のはじまり、懐疑への最初の渴望、労苦が明けそめるという夢、そして確実さや不動の確信の終結、そんなものにすぎないのだ。」 (“Birth is but the beginning of doubt, the first hankering after scepticism, the dreaming of a dawn of trouble, the end of certainty and settled conviction.”<sup>(16)</sup>) 誕生は、生きる最初の出発点ではなく、単に意識のはじまる時点にすぎない、というこの考えは決して奇警なものではない。エリック・フロム (Erich Fromm) も、当然の事実としてつぎのように述べている。「人間は生まれ出たとき…ある限定された状態、つまり本能のように限定された状況から、限定のない、不確実で茫洋とした状況のなかに投げ出される。」 (“When

(16) *Life and Habit*, pp. 59-60.

man is born ... he is thrown out of a situation which was definite, as definite as the instincts, into a situation which is indefinite, uncertain and open.<sup>(17)</sup>」にもかかわらず、「嬰兒は生まれたあとでさえも、胎内にいたときの状態とほとんど変わらないのである。」(“Even after being born, the infant is hardly different from what it was before birth.”)<sup>(18)</sup>)

#### 4. パースナリティーの同一性

胎児と嬰兒とが同一人で、同じ無意識記憶を持っている場合、バトラーはそこに「パースナリティーの同一性」(“personal identity”)があると言う。そして、(1874年のノートで、先祖を“past selves”と呼んでいることでも明らかのように) 同じ無意識記憶を受けついでいるかぎり、たとえば親子といった同一人物以外の者のあいだにも「パースナリティーの同一性」を認めようとするのである。この考えに対してはメイ・シンクレア (May Sinclair)をはじめ、概念の不明確さを批判する者が多いけれども、その不明確さをもっともよく知っているのはバトラー自身である。元来、概念規定などというものは、バトラーに言わせればすべて虚妄である。ことばは分かち難いものを無理に分かつ。ことばはそれ自体不完全なものであるにもかかわらず、あるがままの現実がそれによって正しく表現されるかのごとく一般に誤解されている。だが言語は実体ではない。「パースナリティーの同一性」も厳密に見ればことばの欺瞞であり、現実には「非存在」(“an impossibility”)である。

人は「パースナリティー」ということばをなんの疑いもなく用いるが、厳密にその内容を規定しようとしたら、実体が崩れてしまう、とバトラーは言う。パースナリティーは肉体によって局限されている——少くともそれだけのことは言えそうである。だが、肉体といっても毛髪や爪はパースナリティー

(17) Erich Fromm, *The Art of Loving* (New York, 1957), pp. 7-8.

(18) Ibid., p. 38.

一と無関係であるらしい。だがそう言えば、両手両足も、腕も、腿も、われわれの「自我」の本質的な部分であるとは言えない。大脳、心臓、血液などになると、これは不可欠なものだが、パーソナリティーがそれらによって構成されているとは考えられない。よしんばそれらがパーソナリティーの構成要素であるにしても、それらは水、食物、空気等の物質交代によって絶えず死にまた生まれ変っている。してみると、水や食物や空気もまたパーソナリティーの不可欠の部分と言えるのだろうか。ひとりの赤ん坊と八十年後の同一人物とは、真に同一であろうか。この両者のあいだにはもはや同一の物質はまったく存在しないし、自己同一の意識もないのではあるまいか。

だがパトラーは、思想形成の実際的な効果の前には、こうした厳密な詮議だてが虚しいことを知っており、オクスフォードを流れるテムズ河も、ウインザーを流れるテムズ河も、同じテムズ河であるといった程度の、ごく実際的な意味あいをこめて、胎児と赤ん坊、赤ん坊と八十歳の老人とのあいだに「パーソナリティーの同一性」が存在すると言うのである。この場合、物質や、形態や、意識や、感覚、いわんや人柄などの同一性を主張しているのではなく、無意識記憶が川の流れのように時間を通じて継続していることを言っている。その意味で、胎児はそれ以前の段階である卵子や精子と「パーソナリティーの同一性」を持ち、従って親と、そのまた親と、そのまた親たちと「パーソナリティーの同一性」を持っているというわけだ。

われわれは各自、自己の自己同一性を信じて疑わないが、パトラーに言わせれば、われわれは単一の個我(“single ‘ego’”)ではなく、われわれに強い影響力を及ぼすかすかすの魂ないし自我の意志や衝動などの集まりである。ある人間がほとんど完全に他人の意志によって生活の方向を定めている、という例は少なくない。もしも他人の意志や欲望などが完全に自己を支配したら、もはや違和感が全然ないのだから、自己のなかに他者が働いている意識もまったく存在し得ない。してみると、われわれが無意識に行なっている呼吸、消化、循環なども、何千年前のことであるにせよ、もともとはわ

れわれのの先祖の意志や欲望によって習得された習慣ではなからうか。この問いに回答を与える前に、バトラーは三章を費して、無意識記憶の性質をさらに詳しく解明しようとする。

## 5. 無意識記憶の同化や停止など

受精卵が胎内で成長する過程は、その種の進化の過程によく似ている、つまり胎児はその先祖が経てきた種々の生態や生存条件の諸段階を順を追って再現しているのだ、とよく言われる。バトラーはそれこそ無意識記憶の働きだと言う。生命のはじまりから現在の人間の状態に発展する道を、胎児は先祖の無数回にわたる行為の反復によって無意識記憶として覚えており、それを胎内でくりかえす。たとえば五千万年前に人間の先祖が水中でえらを用いて呼吸していた、そうした段階も胎内で通過する。そして五千万年前の魚のごとき先祖と現代の人間とのあいだには、嬰兒とその八十年後の存在とのあいだに「パーソナリティーの同一性」があると同じ意味で「パーソナリティーの同一性」がある、と言う。

ところが、どんな生物でも、自己自身にほかならぬその先祖があまり（あるいは全然）慣れていない状況にぶつかると、無意識記憶のみによる対処が不可能になるので、意識を働かして問題を解決しなくてはならない。新しい経験を獲得しなくてはならない。しかし、それも無意識記憶による助力が可能な場合のみで、それすら完全に不可能になった場合、その生物は自己の記憶を失って死に至る。なぜなら生命とは記憶にほかならないからだ。たとえば胎児が正常な状態の場合、無意識記憶は十分に働いて胎児になんらの不安も感じさせないが、分娩により出生するとなると、これは進化の歴史上はなほだ経験の浅いことなので、前述のとおり、意識が、従って不安や疑惑が生じてくる。立って歩くというような行為に最初大きな不安が伴うのは、それがまだ完全に熟知された習慣になっていないからである。同様に、雌鶏が卵を産みおとすときけたたけましい声をあげるのを見ると、そこには無意識記

憶としての完全な知識が欠けているのではないかと思われる。卵が鶏を「産む」場合、なんの騒ぎもおこらないのは、それが完全に無意識化された習慣によってなされているからだとして想定される。従って、卵が先か鶏が先かの議論には哲学的な判定を下すことは無理だが、無意識記憶の点から言えば、「雌鶏とは卵が別の卵を作るための一過程にすぎない」(“a hen is only an egg's way of making another egg.”<sup>(19)</sup>)とバトラーは解釈する。

無意識記憶が完全に失われる条件のひとつは、環境の激変である。生物は常規化された習慣に依存して生きているから、それを完全にさまたげられると生存が不可能になる。たとえば、雌鶏の胃袋に入った穀粒は、穀物として慣れ親しんできた環境とあまりにも違う環境に驚愕し、穀物としての記憶や自己認識までも失い、砂嚢のなかで粉碎されて雌鶏の記憶に同化されてしまう。生物にとって最も重大な問題は、自己の先祖が慣れ親しんだ立場に相手をおくか、逆に相手はその先祖の慣れ親しんだ、そしてこちらにとっては、全然未知の立場にこちらをおくかである。人間が地上で支配権をふるってられる理由は、たとえば穀粒の場合とはまったく違って、この問題を相当程度にまで人間側に有利なように解決し得るからである。

無意識記憶のある部分は、時間や程度にほとんど制限なく、その働きを中断することがある。だが、その記憶がはじめて定着した往時の環境と非常に似た環境にふたたび遭遇すると、中断していた記憶がよみがえってくる。バトラーは、こういう環境の変化に従う記憶の突然のよみがえりによって、祖先がえり(隔世遺伝)の現象を説明しようとする。同様にして彼は、ダーウィンが十分に説明し得なかった生物学上の諸問題をつぎつぎと解いていく。そのなかでは一代雑種に関する説明が最もバトラーらしい方法によって貫かれている。

記憶の異ったものどうしの交配がなされると、記憶の葛藤がおこり、両者

---

(19) *Life and Habit*, p. 135.

の融合がまったく不可能になる場合もある。この場合、生物は自己同一性を失って死に至る。ところが、記憶がある程度の葛藤に耐え得る場合、両者の記憶は困難を克服して雑種を作ること成功する。しかし、もしその雑種が親の一方とも他方ともあまりにもかけ離れていると、それ自体としての生存の習慣が無意識記憶として定着していないから、やはり自己同一性を保つことが困難となり、生殖には成功せず、従って一代雑種に終る。これを説明するのに、バトラーは *Percy Anecdotes* のひとつ<sup>(20)</sup>を持ち出すのだが、このあたりに、知的な遊戯と生真面目な意図とを両立させようとするバトラーの“comic seriousness”の本領が発揮されている。

## 6. 遺伝された記憶としての本能

バトラーによれば、習慣の記憶が全体として、不変的な形で、完全に伝達されるためには、それがきわめて頻繁にくりかえされ、遂にその生物自身の欲求と均衡 (equilibrium) を保つに至らなくてはならぬという。少なくとも平常の状況のもとにあっては、その習慣が当の生物にとって可能なる最善のものにならなくてはならぬ。こうして習慣が欲求と均衡を保つに至って、はじめて習慣の反復は安定し、つぎの世代への完全な伝達が可能となり、また同

(20) 「プルタークによれば、ローマのある床屋が非常にものまね上手なかささぎを一羽飼っていた。一旦聞いたことばなら、まず例外なく微妙なところまでまねて喋るというかささぎである。ある日、床屋の庭先から突然トランペットの合奏が聞こえた。ところが、かささぎはそれから一両日だまりこくって物思いに沈んでいるように見えた。この鳥のことを知っている者たちは、いつにない沈黙ぶりにたいそう驚いた。そして、トランペットの音にびっくり仰天した拍子に声も耳もすっかりダメになってしまったのだらうと推測した。だがその推測は見当違いもはなはだしいことが間もなくわかった。なぜなら、プルタークによれば、かささぎはその間ずっと、どうすればトランペットの音をまねすることができるかと深い研究と思索にふけていたのである。実際かささぎは研究を終えると、突然沈黙を破って、先日聞いたトランペットの演奏を、反復、休止、変調等のすべてにわたってまったく正確に再現して聞かせ、みんなを驚かせた。だが、この学習のために、かささぎは知能のすべてを消耗しつくし、そのために以前習いおぼえていたことをすっかり忘れてしまったという。」 *Life and Habit*, pp. 178-179 から引用。



時に習慣の矯正改善作用は停止する。こうして定着した習慣の無意識記憶が本能となって遺伝するわけだから、本能は不完全な知識や未解決な問題につきものの不安感や意識を伴わずして発現される。また、病気、アルコール、麻薬など、記憶を阻止したり乱したりするような条件が加わらぬかぎり、ほとんど成長もしなければ変化もしない。

そういう意味で、パトラーは蜂や蟻の本能のなかに習慣がもっとも典型的な「無意識の均衡状態」(“the unconscious state of equilibrium”)に達している姿を見るのであるが、これは「われわれの知っているもっともすばらしい本能、すなわち蜜蜂や多くの蟻の本能が、習慣によって獲得されたものであり得ないことは明白である」と言うダーウィンの説と真向から対立するものである。さらにパトラーが、環境に不適應な生物を滅ぼす自然の働きが変異の蓄積をもたらす、というダーウィンの自然淘汰説を否定し、変異を支配する根本的な力は欲求であると、主張したことは前にも述べたとおりである。だが、くりかえして言うように、われわれにとって興味深いのは、ダーウィン説批判そのものよりも、そこに至る思考の過程と、そこから生まれたパトラーの人間観や人生観である。

パトラーは蜂や蟻の「無意識の均衡状態」について語ったが、人間の無意識記憶も欲求と十分に均衡状態を保っているであろうか。パトラーは将来の見通しとして、人間の意識の所産である法律や習慣、そして機械までが、かならず蜂や蟻の本能のなかに見られるような無意識の均衡状態に達するであろうと断定する。しかしそこへ行くまでには、もっともっと多くの偏向と不完全さと意識的な知的操作(“cunning”)とが必要である。人間の社会的環境は蜂や蟻のそれと違って、はなはだ不安定で激変しやすい。その変化は人間の欲求の変化を惹起して進歩の機縁を与えることもあるが、人間はまだあらゆる欲求の変化に応じて、自己の均衡を破ることなく適用し得るような知識

(21) *Origin of Species* (London, 1876 ed.), p. 206.

や習慣を定着せしめているとは言えない。そこで人間は祖先があまり経験したことの無い環境にぶつかると論理的な秩序の追求によって本能の智慧を補足する必要がある。理性は本能の補正のために必要不可欠なものである。

ところが人間はしばしば逆の極端に走り、理性のみによって環境の変化に応じ、進歩の欲求を満足させようと試みる。だが、「外面的に理性そのものによって異論なく擁護され得るものほど大きな愚劣と非合理はない。しかも行動の基礎を理性だけにおくならば、人々は容易にどんな誤りにでも導き入れられる<sup>(22)</sup>」というのがバトラーの持論である。そこで彼は、人間の無意識記憶が蜂や蟻のそれにくらべていかに不完全なものであるにせよ、できるかぎりその智慧を生かすべきだと主張する。『ノートブックス』のなかで彼は言う、「折にふれては意識の正金支払いを再開することをくりかえさぬかぎり進歩はあり得ない。かかる支払い再開は、いつでもよんどころなき事情に応じられるような蓄積された資本あってのみ可能である。」（“Progress is impossible without a good deal of occasional resumption of consciousness. Such resumption is only possible as the result of accumulated capital which permits the necessary leisure.”<sup>(23)</sup>）意識的な思考や行為は一般に単なる法則や論理の追求ではなく、蓄積された資本、すなわちもっとも奥深い本能のうちにひそむ無意識化された智慧を生かす努力でなければならない、というわけだ。本来無意識なものを意識に生かすというのは妙な話だが、バトラーが本能の智慧と呼ぶものは「好ましい人々」（“nice people”）のコモンセンスにほかならぬ。「好ましい人々」のコモンセンス、すなわち本能の智慧という考えは、『エリウオン』で芽ばえ、『生活と習慣』で根をおろし、『アーネスト・ポンティフェクス』（*Ernest Pontifex, or The Way of All Flesh*, 1902）で完成し、1901年の『エリウオン』の改訂増補版に加えられた“動物の権利”と“植物の権利”の二章でもっとも文学的な表現を与え

(22) *Erewhon* (London, 1935), p. 219.

(23) *Further Extracts from the Note-Books*, p. 45.

られている。

## 7. 恩寵と律法

本能の智慧は「好ましい人々」(“nice people”)のコモンセンスとして現われる。言いかえれば、好ましくない人々がコモンセンスと称しているものは、過度の理性や、妄信や、世間体等々で歪められた偽物だというわけだ。それではなにをもって「好ましい人々」の条件とするか。それはすでに『エリウォン』の高級イドグラン教徒の紳士道やヒューモアや自由な精神のなかに見られるが、バトラーは『生活と習慣』のなかでそれを一層明らかにする。<sup>(24)</sup>

その前提としてバトラーは、われわれが知識を完全に習得し、それを無意識記憶にした状態について、「われわれは、言わばもはや律法のもとにあるのではなく、恩寵のもとにあるのだ」(“We are no longer, so to speak, under the law, but under grace.”)<sup>(25)</sup>とやっている。このたとえが単なるたとえでなく、バトラーの思想全体の性格や目的を示唆していることについては、もはや贅言を要しまい。「好ましい人々」の条件それ自体もあくまで宗教的なものを指向している。恩寵のもとにある人間——それは、もっともよく生きることを知っておりながら、そのすぐれた知識を意識しない人である。楽しく生きることに熱中するのあまり、自己が存在しているか否かなどに頭を用いない人である。

たとえば科学者のうちにも、恩寵のもとにある人々と律法のもとにある人々がいる。後者は意識的に論理的秩序を武器としながら、人智の境界を拡げようと戦っている科学の開拓者たちであるが、バトラーに言わせれば、この連中は真の科学のためにはさして重要でない、醜悪で不愉快千万な手合いで

(24) バトラーがなぜ“nice people”にあこがれるようになったかについては、脚註(3)にあげた拙稿を参照されたい。

(25) *Life and Habit*, p. 11.

ある。ところが真の科学者は、自分で科学者であるとは自覚していないが、人類の共通の財産とも言うべき諸科学に充分通じており、それを人々のなかにより深く植えつけるに役立っている。にもかかわらず、彼らは決して知識の新領域を開発しようなどとあくせくすることはなく、また他人に干渉しようともせず、自由に生き、他人をも自由に生きさせる、おだやかで平和な人々である。こうした真の科学者についてバトラーは言う、「ある人々は一般によく知られている諸科学に驚くべきほど通曉している——つまり彼らは、すぐれた健康と、すぐれた容貌と、すぐれた気質と、コモンセンスと、エネルギーとを持っている。しかもこうした美質を完全に持っているから、もはやまったく内省を必要としなくなっている——要するに律法のもとにあるのではなく、まったく完全に恩寵のもとにあるので、こういう人々は出会うすべての人から好感をもって迎えられる。」(“Some are admirably proficient <sup>i</sup>n the well-known sciences——that is to say, they have good health, good looks, good temper, common sense, and energy, and they hold all these good things in such perfection as to be altogether without introspection——to be not under the law, but so utterly and entirely under grace that every one who sees them likes them.”<sup>(26)</sup>)

バトラーは『ノートブックス』のなかで、「『生活と習慣』この本の目的のひとつは、科学への不信をひとつの科学的基礎の上におくことであった」(“‘Life and Habit.’ One aim of this book was to place the distrust of science on a scientific basis.”<sup>(27)</sup>)と言っているが、彼がダーウィン説への不信を築く科学的基礎というのは、内省と自意識とを伴う開拓者の性格を持った学問知識ではなく、恩寵のもとにある「好ましい人々」の科学（つまりはコモンセンス）であることをわきまえぬと、このことばは真意を失ってしまうだろう。真の科学とは、健康や良識をひろめ、自意識や労役の必要性を

(26) *Life and Habit*, pp. 31-32.

(27) *Further Extracts from the Note-Books*, p. 112.

なくすことを目的とする。そしてそれこそ、バトラーにとっては、真に宗教的な目標でもあったのだ。

## 8. 信 仰

バトラーが科学者の条件としてあげたことが、真の信仰者の条件と同じであることは、『ノートブックス』のつぎの文からも明らかであろう。

「神を愛するとは、すぐれた健康、すぐれた容貌、良識、経験、やさしい性格などを持ち、手持ちの現金に充分余裕があるようにすることだ。『神を愛する者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。』神によって愛されるのは、神を愛することと同じだ。われわれが神を愛するのは、まず神がわれわれを愛し給うたからだ。」 (“To love God is to have good health, good looks, good sense, experience, a kindly nature and a fair balance of cash in hand. ‘We know that all things work together for good to them that love God.’ To be loved by God is the same as to love Him. We love Him because He first loved us.”<sup>(28)</sup>)

「好ましい人々」の宗教についてのこの考えは、『生活と習慣』のなかから生まれたものである。これが小説『アーネスト・ポンティフェクス』の中心的な主題のなかにとり入れられたことは周知のとおりである。「神によって愛されるのは、神を愛することと同じだ」という、マイステル・エックハルト (Meister Eckhart) を思わせることばの意味するところは深い。バトラーはエックハルトのように「神性」 (“godhead”) という概念を持ち出しはしないし、いわんや「仏性」についてはなにも知らなかったに相違ないが、<sup>(29)</sup> なにかそれらに似たものの存在を想定していたと思われる。バトラーはそれ

(28) *The Note-Books of Samuel Butler* (London, 1912), p. 33.

(29) 『ノートブックス』に、「仏教、それはキリスト教と『生活と習慣』と混ぜ合わせたもののように思われる」 (*The Note-Books*, p. 337) とあるが、バトラー自身、そのことばがいかに深い真実に近づいているかに気づかなかつたのではないかと思われる。

を恩寵と呼ぶ。その恩寵を信じるということは、つまり健康で、ゆたかに、美しく、愛をもって生きることにはほかならない。それが神の御旨にかなった生きかたである。聖書は「愛における者は神におり、神もまたわれに居給う」と教えているが、バトラーによれば、人間が真に人間らしく健全な姿で生きるとき、彼は神におり、神もまた彼におる、ということになる。この信仰には神についての知識は必要ないから、知識に伴う懐疑もなく、従って内省 (“introspection”) もあり得ない。信仰が内省的であるとするならば、その信仰者あるいは当の宗教そのものが偽物である。あるいはせいぜい律法的なものにすぎない。『生活と習慣』でバトラーは、キリスト教会が本来「恩寵」を至高善と仰いでおりながら、近来しだいに内省的に傾きつつあることに不満の口吻を洩らしているが、これはおそらく、幼少のころから、いわば権力づくで「内省的な」信仰を強制されてきたことに対する憤懣の表明であろう。

『生活と習慣』のなかで “faith” ということばに与えられている特殊な意味はふたつある。ひとつはいま言った「恩寵」に対する信仰、すなわち「好ましい人々」の要件である健全な先祖の記憶に対する信仰である。「生活は経験の上にうち立てられた信仰である」 (“Life ... is faith found upon experience, ...”<sup>(30)</sup>) という場合の信仰がそれである。この信仰には信仰の意識が伴わない。もしなにか意識するものがあるとしたら、それは「好ましい人々」つまり真に紳士淑女と呼ぶにふさわしい人々の本能の智慧（コモンセンス）を尊重することである。「信仰は、ある人々が誤って主張しているように、十分な証拠なしになにかを信じることではない」と『ノートブックス』でバトラーは言う、「そんなものは信仰ではなく、むしろわれわれがもっとも誠実に支持すべきすべてのものに対する不信にほかならない。信仰とは、もっともすぐれた男女の本能それ自体が、軽々にしりぞけられない証拠であると信じることである。」<sup>(31)</sup>

(30) *Life and Habit*, p. 298.

(31) *Further Extracts from the Note-Books*, p. 335.

さらに“faith”には、進化の(起源ではないが)もっとも重大な条件のひとつである、自己の意志を達成する力に対する信念という意味が与えられている。「実際もし人間に芥子種ひと粒ほどの信仰でもあったとしたら、山を動かすことはできないとしても、少なくともそれに劣らず困難なこと、つまり芥子の木を作ることはできるであろう<sup>(32)</sup>」という場合の「信仰」がそれである。生物の進化を含めて、なにごとにせよ進歩、改善、成長等を可能にするためには、当の生物自身の意志とその意志を達成する能力(その両者は相互に依存している)とが必要だが、それと同時に自己の努力によってその目的を達成し得るといふ信念(faith)がなくてはならぬ。「その信念がなければ<sup>(33)</sup>いかなる行為もあり得ないし、信念があればあらゆる行為が可能である。」だから、もしも鳩が孔雀になりたいという熱望をあらゆる時代にわたって持続的に持ち、しかもそれが可能であると信じたとしたら、それは実際に可能になったかもしれない。

こういうバトラーの説に関連して思い出すのは、バリー(James M. Barrie, 1860-1937)の物語『ケンジントン公園のピーター・パン』(*Peter Pan in Kensington Gardens*, 1904)に出てくる有名な一節である。「鳥たちが飛べるのにわたしたち[人間]が飛べないのは、鳥たちが完全な信念(“perfect faith”)を持っているからにすぎません。信念を持つことは翼を持つことにほかならないのです。」<sup>(34)</sup>だから「わたしたちだって、あの晩のピーターのように、自分だって飛べるんだとがむしゃらに信じて(“dead-confident-sure”)疑わなかったら、やっぱり飛べたんじゃないかと思いません<sup>(35)</sup>」とこの物語の語り手は言う。まことにバトラー的な考えである。バトラーによれば、生物は信仰の生きた形相(form)である。従って信仰を持つことは腕を持つことであり、翼を持つことである。この信仰(信念)も、完全

(32) *Life and Habit*, p. 69.

(33) *Ibid.*, p. 202.

(34) (London, 1934), p. 26.

(35) *Ibid.*, p. 22.

なものになり、無数回にわたる意識的な努力によって欲求と均衡を保つに至ると、恩寵の信仰と同じく無意識化する。それは完全な信念を持った鳥の状態を見れば明らかである。だが問題は、完全で持続的な信念を持つことははなはだしく困難だということである。人間は空を飛ぶ自己の可能性を「がむしゃらに」信じることはできない。鳩が、自分は孔雀になれる、という信念を持つこともほんとうはあり得ない。百姓の子伴がケイムブリッジ大学の数学の首席卒業生となることを望まないように、生物は自分の理解し得ないものを本気で達成しようとは思わないものだ。

にもかかわらず人間には手足が、鳥には翼が生えた。先祖がどんなものであったにせよ、孔雀はいまの孔雀の姿になった。だがそれを可能にした信念なり信仰なりは、徐々に、きわめて徐々に生まれたのである。進化の要因としてのこの信念もやはり、不十分な証拠によってものを信じこむことではない。同様の経験を無数にくりかえすことによって、親しみや安心感が生まれる。それがやがて自信 (confidence) になる。信念 (faith) はそのあとようやく生まれる。だから、進化の要因としての信念も、一世代や二世代で成るものではなく、無数の世代にわたる定向的な経験の積み重ねを必要とする。その意味でも恩寵の信仰と根本的には同じ性格を持ったものなのである。

ダーウィン説批判を通じて、科学と宗教との和解を志したバトラーは、こうして人間存在の条件を彼なりの方法で徹底的に探求し、結局、存在の根本条件である本能とそれが与えてくれる生命力 (life-force) とを信じることによって素志を遂げようとした。バトラーがその信仰によって十分に精神的な均衡を回復したかどうかは別として、ここに至るバトラーの思考過程のあらましを理解することが、彼の文学、特に『アーネスト・ポンティフェクス』を正しく理解する重要な予備知識になることは疑いない。また、バトラーの本能論がいかにも未熟で、独断的で、誤りだらけであるにしても、神を失った人間がそれに代って依るべきものを探求する道のひとつを示唆する書物として、『生活と習慣』が今日なお多少の思想的な価値を有していることは再認識されて然るべきであろう。